

2010年3月4日(木)～7日(日)

## 中国四川大地震パンダタオルプロジェクト 第4回現地訪問 報告書



光明村のお祭りにて、パンダタオルプロジェクトの説明と、イベントのお知らせをするメンバー

主催：特定非営利活動法人レスキューストックヤード

協力：CODE 海外災害援助市民センター／株式会社ラッシュジャパン

### [事務局・問い合わせ先]

中国四川大地震パンダタオルプロジェクト事務局（特定非営利活動法人レスキューストックヤード内）

〒461-0001 名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階 / 電話 052-253-7550 / FAX : 052-253-7552

E-mail : [info@rsy-nagoya.com](mailto:info@rsy-nagoya.com) HP : <http://rsy-nagoya.com/>

中国四川大地震パンダタオルプロジェクトは、『株式会社ラッシュジャパン「LUSH チャリティバンク」助成金事業』で実施しています。

## 【訪問の目的】

### 1. 親睦を深める

被災者・支援者という関係を超えた心の交流

### 2. 生きる力を学ぶ

被災することの実態を知り、復興に向けて力強く歩む姿から、大きな災害にも立ち向かっていける「生きる力」を学ぶ

### 3. 減災の智恵の提供

次の災害に備えた減災の智恵を日本の取り組みの中から提供する

## 【スケジュール】

日程	内容
3月4日（木）	中部国際空港→成都（上海経由）へ移動、宿泊 CODE 海外災害援助市民センターの吉椿雅道さんとスケジュールの確認 宿泊：Sim' s cozy Garden Hostel
3月5日（金）	北川県香泉郷光明村にて 午前： 世界婦人デーに合わせたお祭りに参加。（場所：5組の組長の家付近） ① 村にある鍋を使いトン汁を作る。村の方に借りた炊飯器でお米を炊き、おにぎりを村の人と一緒に作る。 ② スタッフ浦野よりパンダタオルプロジェクトの説明とイベントのお知らせ。その後、吉椿さんのギターに合わせ「世に一つだけの花（SMAP）」を合唱。メンバーによる「炭坑節」の披露。 ③ お祭りが終わった後、トン汁とおにぎりを振る舞う。 ④ パンダタオルと防災ずきんと一緒に作る。 ⑤ パンダタオルとラッシュジャパンのソープを贈呈。 昼： 5組のみなさんと一緒に村の家庭料理を頂く。（場所：5組） 午後： 仮設の治療室を訪問し、お医者さんの話を伺う。（場所：仮設の治療室）
3月6日（土）	午前： 廃墟となった漢汪の街を見学 綿竹市遵道鎮棚花村を訪問／ 思琪（スーチー）さんの案内で、棚花村の方に、パンダタオル、熊猫通信、ラッシュジャパンのソープを贈呈。 昼： 村のお店でご飯を頂く。 午後： 思琪さんから地震当時の話や、今後の希望や夢についてお話を伺う。（場所：お店）
3月7日（日）	成都→中部国際空港（上海経由）

## 【参加者】

- ・RSY スタッフ：浦野愛、関口威人、柚原里香
- ・ボランティア：椿佳代、矢野和宏、清水紀子、鈴木ひさ子、浦野恵理（愛知大学）、伊藤聖也（愛知大学）

## 【協力者】

- ・CODE 海外災害援助市民センター：現地コーディネーター・通訳
- ・財団法人名古屋国際センター：メッセージカード中国語翻訳
- ・パンダタオルプロジェクトボランティア：熊猫通信の中国語翻訳、パンダタオルの制作

## 【贈呈した品】

- ・パンダタオル 約100個、熊猫通信 約100通、ラッシュジャパンのソープ 約200個

## 【現地報告】

### 3月4日（木）炊き出しの下ごしらえ

宿泊施設の炊事場をお借りして、炊き出しの準備を行った。  
野菜は現地調達、包丁、新聞紙などは日本から持参した。



村の人との再会を楽しみに、野菜を切った

### 3月5日（金）北川県香泉郷光明村にて、世界婦人デーに合わせたお祭りに参加

① トン汁、おにぎりの炊き出しの準備を行った。村にある大鍋を使い、トン汁を作った。おにぎりは、村の方に借りた炊飯器でお米を炊き、村の人と一緒に作った。



言葉は分からなくても、村の方が見まねで作業を手伝ってくれた

薪で火を起こし、トン汁を作った 村の方と一緒ににおにぎりを作った

②お祭りの中で、パンダタオルプロジェクトの活動の説明と、イベントのお知らせをした。



「パンダタオルを覚えていますか？」という質問に、「はい！」という声が返ってきた



防災ずきんの説明をした



「世界に一つだけの花」を合唱した

③お祭りの後で、炊き出しを振る舞った。



トン汁はすぐに完売！



「謝謝」と言いながら、おにぎりとお汁を食べる村の人たち



④ パンダタオルと防災ずきんを一緒に作った。



防災ずきんの作り方を見ている村の女性



作り方を習う村の人たち



パンダの顔ができ、笑顔を見せる女性

⑤ ラッシュジャパンのソープを贈呈した。



ソープを手にとる村の人たち



「謝謝！謝謝！」笑顔を見せる人たち



### 仮設の治療室を訪問し、お医者さんの話を伺った

仮設の治療室を見せて頂いた。治療室は、もうすぐたたむことになるという。病院はこの近くにはなく、今後どうしたらいいのかと頭を悩ませていた。



お医者さん



仮設の治療室



奥にはベッドが1台あるだけ

### 3月6日（土）廃墟となった漢汪の街を見学

ゴーストタウンと言われている漢汪の街を見学した。奥へと歩いていくにつれて人が減り、建物は当時のままの状態に残されていた。地震の怖さを目の当たりにする場所であった。観光地化すると言われている場所は、当時のままになっており、説明書きなどの看板も立っていた。



観光地化するため、そのままの状態に残してあった

## 綿竹市遵道鎮棚花村を訪問

思琪（スーチー）さんの案内で、棚花村の方に、パンダタオル、熊猫通信、ラッシュジャパンのソープを贈呈した。



一人ひとりにお渡しした



説明をしながら渡すと、「謝謝」と言って受け取ってくれた



思琪さんから震災当時の話や今後の希望や夢についてお話を伺いました。



思琪さんは地震でお婆さんを亡くしたそうです。その悲しみを抱えつつも、困っている人のために力になりたいと、自ら瓦礫の片づけや子どもを亡くしたお母さんたちに得意の刺繍を教える活動をしたそうです。2008年はボランティアがたくさんいたが、2009年には国からボランティアグループが解散させられたこともあり、その時点で、「復興は自分たちで頑張っていかなければならないんだ。」という自助の気持ちが目覚めたと言っていました。今はNGOに興味があり、村の日常的問題に目を向けながら、「自分にできることを探して取り組んでいきたい。ボランティアをすることが一番楽しい。」と、生き生きとした表情で話し、最後に「来てくれてありがとう。」という言葉をかけてくださいました。



今年も菜の花の満開の時期を迎えました